

「遊び仕事」への招待：自然との対等な出会いを求めて

京都府立大学名誉教授

三橋 俊雄

◆経歴◆

1949年：横浜生まれ

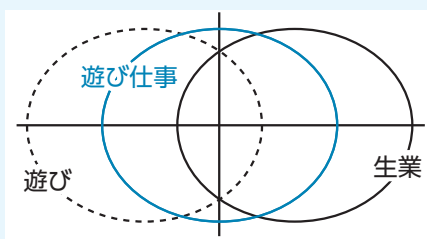
1991年：学術博士(千葉大学)

1991年～2016年：筑波技術短期大学、千葉大学、京都府立大学において障がい者・伝統文化・地域活性化等の課題に取り組み、現在は台湾原住民タロマク族の「狩猟＝遊び仕事」について研究中

1. 遊び仕事とは

ここで紹介させていただく「遊び仕事」とは、いい大人たちが自然の中に分け入り、ワクワクと心躍らせながら身体を媒介として獲物を獲り、植物を採取し、最終的にはそれを食べてしまう、小さな生業活動とも言えるもので、大した経済的な意味はなく、むしろ遊びの色彩が強い人間の行動を言います。例えば、海のタコ・イカ釣りやイワノリ摘み、川のウナギ・アユ・エビ捕り、山のウサギ獲りや山菜摘みなど。これらは、私が京都の丹後半島で出逢った「遊び仕事」です。

これらの「遊び仕事」は趣味の遊びと言ってもよいものですが、「環境倫理学」の領域から生まれた概念で、「遊び」と「生業」の中間的な性格を持っています(下図)。自然との乖離がますます拡がりつつある現代社会において、人間と自然の持続可能な関係・あり方を見直す重要なキーワードとして注目されています。



画像提供：筆者

(1) タコ釣り

「食べたいな」と思ったら海に捕りに行きます。堤防から眺め、穴に入ってじっとしているマダコを探します。穴からタコをおびき出すにはバカシ(疑似餌、右図)

を見せる場所が重要です。もともとタコが穴から出ている時は頭がゆらゆらと揺れているためすぐに分かりますが、タコをうまく釣るには、海



画像提供：筆者

面が鏡のように穏やかで、海底まで見ることが条件です。タコが移動して止まり、体の色が真っ白に変わったその時がタコ釣りの絶好のチャンスです。タコ釣りの季節は4、5月～10月です。

(2) イカ釣り「いかつけ」

道具は竿とビシ(おもり)のついた糸、そしてバカシです。船で釣るとイカの真上まで近づけるので捕りやすくなります。夜釣りの場合は「いかつけ」と呼び、夕方から夜の12時ごろまで行います。明るく海の透明度も高い満月の夜は、バカシがよく光るためイカがよく釣れ、一晩で胴長20センチくらいのアオリイカを100杯近く捕る人もいます。捕ったイカは刺身やスルメにして家族で食べたり人に分けたりするなど、食べる楽しみよりもイカを釣る楽しみの方が大きいと言います。漁期は9月中旬～11月です。

(3) 野ウサギ猟「バイ投げ」

「バイ投げ」は、雪山で二股の枝にアカマツの葉をくくりつけた「バイ」を投げて捕る野ウサギ猟です。まず、陽の当る斜面で曲がった木の根元近くに眠っている野ウサギを探し出します。そして気づかれないように近づき、天敵のタカやトンビが襲いかかってきたかと思わせるように続けざまにバイを空中に投げ上げます(下図)。バイはヒューヒューと風を切って音を発し、その音に驚いた野ウサギは身を翻して木の根元の隠れ穴に一目散に逃げ込みます。そこを間髪いれず走り寄り、すばやく



画像提供：筆者

周囲の雪を踏みつけて逃げ道をふさぎ、テンズキ（木製の除雪具）で慎重に穴を掘りすすんで野ウサギの後ろ足を探り出し、両足を掴んで引っ張り出します。このパイ投げは節分までが猟期で、午前10時～午後3時くらいまで行います。

(4) 「にぎりすくい」

「にぎりすくい」は、川が大雨で増水して濁り、水中の酸素不足のため魚がふらふらとよどみに集まってきたところを大きな「タモ（網）」で上流から下流に向かってすくい、ぐるっと岸に寄せてあげる漁法です。アユもコイもウナギもいっぺんに捕れて、こんなにもおいしい漁はないと言います。昭和30～40年頃までは各地で行われていたようですが、危険なため、今では禁止になっている地域もあります。タモ（写真上）は、杉の枝を丸く曲げて、直径数mmのしなやかな枝先を両方から重ね合わせ、糸で縛り輪を作るもので、柄の長さは4mほどです。網の部分は絹糸を使用して女性たちが編み、毎年柿渋につけて干すことで補強していたようです。



画像提供：筆者

(5) 手長エビ漁

京都府北部を流れる由良川^{ゆらがわ}の漁です。サナギや身欠きニシンの餌を糸に吊しておびき出し、エビが出てきたところを直径20cmほどの細長い小さな網で捕ります。エビは驚くと後方に逃げようとするため、その習性を活かして網をエビの背後からそっと近づけて捕ります。一方、「モンドリ」という仕掛けを用いて捕る漁は6～12月まで行われます。「モンドリ」にサナギを入れて円錐形の蓋で閉じ、紐の一端を川辺の石に結わえて、10カ所ほど沈めます。2日ほどして、仕掛けをY字型の枝先にひっかけて引き上げると、



画像提供：筆者

1つのモンドリに7～8尾、合わせて80尾ほどの手長エビが捕れます。捕れたエビは高級食材ですが売るわけではなく、天ぷらにして家族や友人たちに振る舞います（写真左下）。

(6) イワノリ摘み

京丹後市袖志^{そでし}では、イワノリ、テングサ、モズク、アワビ、サザエなど、近くの岩場まで行けば海の幸を採集することができ、この地区では「おかずとり」と言い、11月の凧の日^{きょうがみさき}にイワノリの「山の口明け（解禁）」があります。お母さんや高齢の方たちが早朝から経ヶ岬^{きょうがみさき}の岩場に集合して、イワノリ摘みが始まります。採集したイワノリは海水と川の水を使って砂を取り除き、ノリバシゴ（写真右）に干します。できあがったイワノリは家で食べたり、お小遣い稼ぎにもなっています。



画像提供：筆者

2. 遊び仕事の今日的価値

これらが「遊び仕事」の世界です。自然に分け入ってプリミティブな道具で相手と対峙し、獲物を捕獲あるいは採集する。今までの体験で培ったスキルを駆使し、身体感覚を総動員して獲得した成果は自らの喜びであり、仲間内での自慢や誇りにもなります。また、成果を皆さんにお裾分けすることの楽しみにもつながります。

すなわち「遊び仕事」は、(1) 人間行動の本質である「遊び」を通して自らが自然との共生関係を結ぶことができる第一歩となります。またそれは、(2) 人間と自然がプリミティブな道具と自らのスキルで対等に向き合える「等身大」の共生の場でもあります。さらに、(3) その「遊び仕事」を通じて身の周りの自然や生活文化の豊かさを再認識することにもつながり、地域の伝統的生活文化としての継承、さらには地域の自然環境の保全にも寄与することができます。翻って、現代の私達は情報化社会やバーチャルな社会のただ中にあり、だからこそ、(4) 「遊び仕事」が「生身」の自然と付き合える、人間と自然との大切な関わりの場になるのではないのでしょうか。